

病院施設等建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

富山県富山市

水橋荒町遺跡

1997年10月

富山市教育委員会

序

富山市は、東に立山連峰を望み、北は日本海、西には呉羽山丘陵を擁する風光明媚な土地であります。恵まれた大自然の中で先人が残した貴重な文化財は、郷土富山の歴史を知るためのかけがえのない遺産であり、これを保護し、未来へ継承していくことは、現代の私たちの責務といえます。

富山市内には約600か所にわたる遺跡があります。近年、市の北部地区では各種開発に伴って数多くの遺跡の発掘調査が行われ、古代の集落の姿が次第に解明されつつあります。

特に水橋地区におきましては、平安時代の文献に水橋駅が所在したことが記されるなど、古代の交通の要衝として注目すべき地域であります。

中でも水橋荒町遺跡は、過去の発掘調査で、奈良時代の大形建物跡や数多くの井戸が発見されており、役所的な施設があったと推定されるなど、重要な成果をあげております。

このたび、本委員会では、病院建設に先立ってこの遺跡の発掘調査を実施いたしました。調査の結果、奈良時代及び鎌倉～室町時代に営まれた集落跡が発見され、奈良時代の広大な集落群の南限を確認できたことは、遺跡の性格を明らかにする上でも大きな成果といえます。

この調査成果をまとめた本書が、私たちの財産である埋蔵文化財を理解していただく上で参考になれば幸いです。

最後に、発掘調査にあたりご協力いただきました野村病院 野村幸男氏をはじめ、地元水橋地区並びに各関係機関の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成9年10月

富山市教育委員会

教育長 大島 哲夫

例　　言

1. 本書は、富山県富山市水橋辻ヶ堂480番地内に所在する水橋荒町遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、病院施設建設工事に伴い、野村病院（院長　野村幸男）の依頼を受けて実施した。
3. 調査は、富山市教育委員会が主体となり実施した。調査にあたっては、山武考古学研究所（平岡和夫、桐谷 優、常深 尚）が富山市教育委員会の指導の基に実施した。

調査期間　調査面積、担当者は下記の通りである。

試掘調査　期間　平成8年3月26日～同年3月28日

面積　124.5m²（対象面積　15,143m²）

担当　富山市教育委員会生涯学習課　主任学芸員　古川知明

本調査　期間　平成8年6月24日～同年7月31日

面積　820m²

担当　富山市教育委員会生涯学習課　主任学芸員　古川知明

山武考古学研究所　平岡和夫、桐谷 優、常深 尚

4. 整理調査及び本書の編集は桐谷が担当し、金子浩美、江口弘子の協力を得た。
5. 発掘調査により得られた資料は、全て富山市教育委員会に保管してある。
6. 本書の執筆分担は下記の通りである。
第Ⅰ章　古川知明　第Ⅱ～Ⅴ章　桐谷 優
7. 発掘調査から報告書刊行に至るまで、以下の方や関係機関に御指導・御協力いただいた。
記して感謝の意を表したい。（順不同、敬称略）
小野正敏、㈱ビルド、開成測量㈱、㈱日本テクニカルセンター
8. 発掘参加者は下記の通りである。（順不同、敬称略）
久保田あさこ、菅田義一、宮城桂子、竹内晶子、吉田史子、西野昌子、前田絹枝、前田コト・林ミツイ
尾崎一男、井上宗作、矢潤澄子、新鞍キミエ、菅田ハルエ、菅田暉子、長井初枝、押田百合子、魚住弥
三松

凡　　例

1. 調査で使用した略号・記号については下記の通りである。

M A : 水橋荒町遺跡

S D : 構

S B : 掘立柱建物跡

S K : 穴

S E : 井戸跡

2. 平面図に示した北方向は、真北を示す。

3. 遺跡位置図（第1図）は国土地理院50,000分の1『魚津』を使用し、調査区周辺の地形図（第4図）は富山市基本図2,500分の1を使用した。

4. 遺物番号は、本文・挿図・図版番号共に一致している。

5. 遺構・遺物の挿図に使用したスクリントーンは、以下の通りである。



地山



煤・炭化



赤彩

目 次

序
例 言
凡 例

I	調査に至る経緯	1
II	遺跡の位置と周辺の主な環境	1
III	調査の方法と経過	5
IV	基本層序	5
V	遺構と遺物	
A.	遺構	7
B.	遺物	15
VI	まとめ	21
報告書抄録		

表 目 次

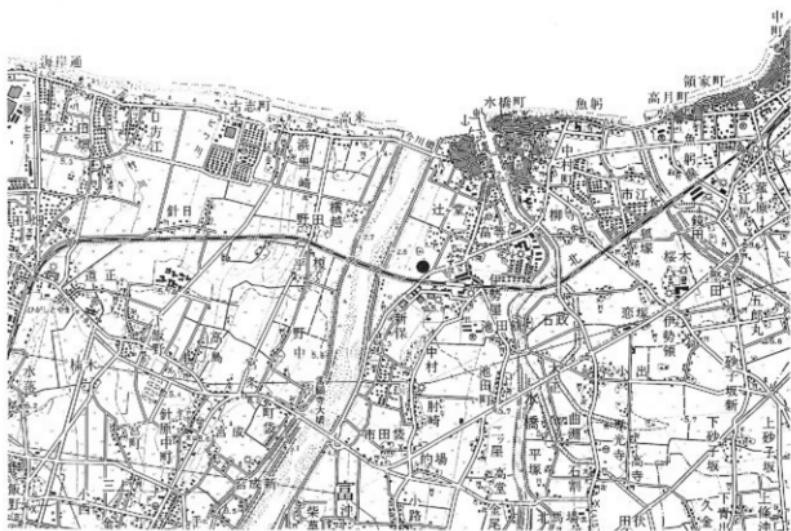
表1	周辺の遺跡一覧	3
----	---------	---

挿 図 目 次

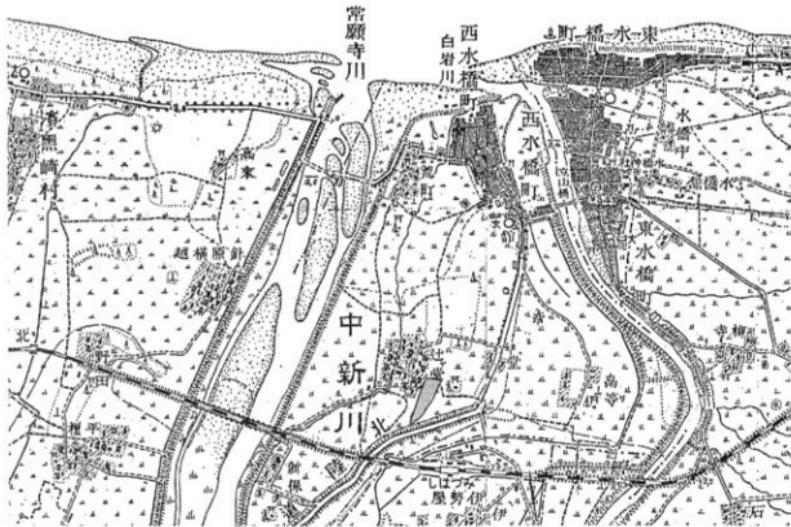
第1図	水橋荒町遺跡位置図	9
第2図	大日本帝国陸地測量部 假製版 二万分一地形図『滑川』『東岩瀬』	10
第3図	水橋荒町遺跡と周辺の主な遺跡	11
第4図	調査区の位置と周辺の地形図	13
第5図	基本層序模式図	14
第6図	遺構全体図	16
第7図	SB1・2	18
第8図	SD1・2	19
第9図	SD3・4	20
第10図	SE1・2・4～7・9	21
第11図	SE10～12・14・15	22
第12図	SK3・8・13	23
第13図	SD1・2出土遺物実測図	24
第14図	SD2・SE1・2・4出土遺物実測図	25
第15図	SE5～7・10・11・15出土遺物実測図	26
第16図	SK13、包含層出土遺物実測図	27
第17図	包含層出土遺物実測図	28

図 版 目 次

図版1	1. 調査区遠景	(空撮)	8. SE7 近景	
	2. 調査区全景	(空撮)	図版4	1. SE9 (南より)
図版2	1. SB1・2、SD1	(空撮)	2. SE10 (南より)	
	2. SD1、SB1・2	(北より)	3. SE11 (南より)	
	3. SD1断面	(東より)	4. SE12 (北より)	
	4. SD2	(東より)	5. SE14 (北より)	
	5. SD2断面	(北より)	6. SK13 (北より)	
図版3	1. SD3、SE15	(東より)	7. SB1・2 (東より)	
	2. SE1	(東より)	8. SK3 (東より)	
	3. SE2	(東より)	図版5	SD1・2出土遺物
	4. SE4	(北より)	図版6	SE1・2・4～6出土遺物
	5. SE5	(南より)	図版7	SE7・10・11・15、SK13, 包含層出土遺物
	6. SE6	(東より)		
	7. SE7	(南より)		



第1図 水橋荒町遺跡位置図 (1:50,000) 平成3年11月1日発行



第2図 大日本帝國陸地測量部 假製版 二万分の一地形図「滑川」「東岩瀬」 明治四十四年六月三十日發行

I. 調査に至る経緯

水橋荒町遺跡は、富山市教育委員会が昭和63年度から平成3年度まで実施した市内分布調査の結果新たに発見された遺跡である。

平成3～5年度には遺跡の西部で市下水道建設課が主体となる水橋浄化センター建設に伴って発掘調査が実施され、奈良時代を主とする集落跡が検出された。これらは建物規模が大きく、また石帶の出土などから官衙的施設あるいは寺院等に間連した施設ではないかと推測された。

平成8年1月、野村病院（院長 野村幸男）から病院施設建設に伴う埋蔵文化財所在確認依頼が提出された。建設予定地の一部分が水橋荒町遺跡南部の概略範囲に含まれていたため、協議の上試掘調査を実施することとなった。

試掘調査は平成8年3月26日と27日の2日間で行い、対象とした15,143m²の内2,470m²に弥生時代及び奈良時代の遺構・遺物が発見された。

調査では、土坑や溝が検出され、その中からは主として奈良時代の土師器・須恵器が出土した。土坑は直径30cm程度のもので建物の柱跡と考えられた。これらの遺構群の南側には激しい湧水のある粗緻層が広がっており、常願寺川の旧流路の痕跡と考えられた。このことから遺跡は、旧流路に面して形成された奈良時代の集落跡であると考えられた。

この結果に基づき、埋蔵文化財範囲の保護措置について協議したところ、遺跡範囲が工事区域の西端部であることから、一部を駐車場及び緑地として利用することとし、建物部分にかかる820m²について発掘調査を実施することとなった。

調査は、富山市教育委員会が調査主体となり、その指導のもと山武考古学研究所（所長 平岡和夫）が実施することで合意し、平成8年6月市と野村病院の間で協定が締結された。

ここでは、発掘調査を平成8年6月24日から7月30日まで実施し、引渡し完了後引き出上品修理を1か年で行うこととした。

調査は6月24日に着手し、予定どおり7月30日までに完了し、終了確認をへて7月31日付けで調査区域の引渡しを完了した。

II. 遺跡の位置と周辺の主な遺跡

1. 遺跡の位置

水橋荒町遺跡（市遺跡番号44）は、市街地から北東約10km、北陸本線水橋駅から北東約600m地点に位置し、常願寺川と白岩川に挟まれた標高2.5mの扇状地の末端部に立地する。

現在周知されている遺跡面積は579,000m²に及ぶ広大な範囲で、これまでの発掘調査により、縄文時代中期から近世に亘る大規模な複合遺跡であることが判明している。この中で主体となるのは奈良・平安時代であり、官衙的様相を示す大型の掘立柱建物群や遺物が多数検出されている。

当遺跡は、この様な遺跡の南東端にあたり、南側には県道辻ヶ堂・市田袋線が走行している。



第3図 水橋荒町遺跡と周辺の主な遺跡 (1 : 20,000)

2. 周辺の主な遺跡

遺跡周辺には、縄文時代前期から近世に亘る営みが窺えられるが、主体となるのは奈良・平安時代と考えられる。従来、富山平野の形成は縄文時代後期から晩期と考えられていたが、平成3~4年度にかけて実施した水橋荒町遺跡の発掘調査で出土した縄文時代中期後葉の土器により、富山平野の形成がそれ以前であることが判明している。また、縄文時代の遺跡は、概して常願寺川左岸に多く認められ、扇状地末端部及び白岩川右岸では希薄である。

常願寺川左岸では、縄文前期~近世の野田・平桜遺跡(2)、縄文後期~古墳前期の野田II遺跡(3)、縄文後期~近世の野中新長幅遺跡(4)、古墳前期~奈良・平安の平桜龜田遺跡(5)、奈良・平安の高来遺跡(6)、奈良・平安~近世の横越遺跡(7)等が知られている。

当遺跡が立地する扇状地末端部では、奈良・平安~中世の水橋岱等遺跡(8)、水橋伊勢屋A遺跡(9)、古墳~中世の水橋池田館遺跡(10)が顕著であり、各遺跡とも水橋荒町遺跡との相互関連が想定される。

白岩川右岸では、縄文後期・奈良・平安・中世の水橋石政遺跡(11)が代表的である。

表1 周辺の遺跡一覧表

種別	名 称	所 在 地	時 代	出 土 通 物	備 考
1 集落跡	水 桥 荒 町	水橋光町、水橋北上町、水橋北上町 字荒町、今川、堀三番割、西 田、牛毛、鐵田、天馬、鈴木割、水 橋川原町字茂平野	縄文(中~晚)・弥生・ 古墳(前・後)・白鳳、 奈良・平安・中世	縄文土器、石器(打製石斧、磨製石斧) 土師器、土器群、須恵器、土罐、 刀劍、帶、铁石、銅津、土師質土器、瓦 磚、青磁、井戸陶、木軸、油物、木 牌、墨書き	1990・1991年 試掘調査 1991・1992年 発掘調査
2 散布地	野 田 - 平 桜	野田字大屋割、平桜町、早塚山田、 平桜字下呂、武周崎字五郎五、御 馬渡、鷹野、野田字砂島前、戸尻 割、木本字下割、平桜字原敷前、執行 田割、天馬原左脇	縄文(前・中・後・晚)・ 弥生・古墳(前)・奈 良・平安・中世	縄文土器、石器(磨製石斧、打製石斧) 土器群、土師器、須恵器、七 錫、铁津、青磁燒、燒造土器、陶器は 白台軸	白台軸は平桜 遺跡公平桜城推 定地を含む 1985年試掘調 査
3 散布地	野 田 Ⅲ	野田字引御前、浜崎崎	縄文(後・晚)・弥生・ 古墳(前)	縄文土器、弥生土器、土師器	
4 散布地	野 中 新 長 幅	野田字宇田、鉢田、古屋敷町、宮余 字長輪割、平桜字村江前、石尾丸 廻、大庭割、浜黒崎字御内波	縄文(後)・弥生・古墳 (前)・奈良・平安	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器	弥生→古墳主 体
5 散布地	平 桜 龜 田	平桜字寺山(福井町)・南早桜町割・ 神農家割・跨下割・一垂割、龜田割、 屋敷割、横越	古墳(前)・奈良・平安	土師器、須恵器	
6 散布地	高 来 家	高来字中野、浜黒崎字高来畠	奈良・平安	土師器、須恵器、土錐	
7 散布地	横 越	横越、横越字鹿敷	奈良・平安・中世・近世	土師器、須恵器、土師質土器、近世陶器	奈良・平安主体
8 散布地	水 桥 庄 等	水橋北・庄字池田、水橋巣等字宮北 ・官の南・西狹町	弥生・古墳・近世	弥生土器、古式土器群、越中瀬戸燒	奈良・平安主 体
9 散布地	水 桥 伊 势 屋 A	水橋伊勢屋、水橋池田館字町の宮	奈良・平安・中世	土師器、須恵器、珠洲燒	
10 散布地	水 桥 池 田 前	水橋池田館字町の宮、水橋伊勢屋、 水橋町山、水橋中村、水橋前	古墳・奈良・平安・中世	土師器、須恵器、珠洲燒、土師質土器	奈良・平安主 体
11 散布地	水 桥 石 政	水橋石政、水橋人正字大正割	縄文(後)・奈良・平 安・中世	縄文土器、土師器、須恵器、土師質土 器	
12 散布地	浜 黒 崎 町 領	浜黒崎字町畠、高来町・松下	奈良・平安	土師器	
13 散布地	浜 黑 崎 龜 田	浜黒崎字領田	奈良・平安・中世・近世	土師器、須恵器、珠洲燒、土師質土 器、近世陶器	1992年試掘調 査
14 散布地	官 条 南	官条字半畠田割・南割・坊丸割・花 了免割・野寺割・湖野割、野中字前 田、町見	縄文(後~晚)・弥生 (中)・古墳(前)・平 安・中世・近世	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、 珠洲燒、橫洋、近世陶器群	
15 散布地	水 桥 東 出 口	水橋町字御田、水橋中村町字九門、官川	奈良・平安	土師器	
16 散布地	水 桥 朝 日 口	水橋町字下柳町、水橋市町、水橋 町中村	弥生・奈良・平安・中世	弥生土器、土師器、須恵器、土錐、珠 洲燒、土師質土器	
17 散布地	水 桥 水 澄	水橋館町字中田、早福田、篠代、稻 初田、道引、養造寺	平安・近世	土師器、須恵器、越中瀬戸燒	
18 散布地	水 桥 伊 努 尾 日	水橋伊努尾、水橋中村	中世	土師質土器	
19 散布地	水 桥 中 村	水橋中村	奈良・平安	土師器、須恵器	



第4図 調査区の位置と周辺の地形図 (1:2,500)

III. 調査の方法と経過

1. 調査の方法

遺跡地は、既に市教育委員会により試掘調査が実施されており、遺構確認面までの深度、出土遺物、遺物包含層の有無・位置が詳細に把握されていた。したがって、本調査はこの試掘成果を踏まえて実施した。

調査はまずバックホーを導入し、耕作土（第1層）を除去した。第2層の黒色土は部分的に遺物を包含しており、その箇所は人力で掘り下げた。遺構確認面である第3層に達した時点で、遺構検出作業及び水準測量・公共座標（ 5×5 m）の設定を行った。座標杭には、北から南へ1・2・3……、西から東へA・B・C……と呼称を付し、各北西隅の杭呼称をそのままグリッドの呼称として用いた。遺物包含層からの出土遺物は、層位を確認して一括して取り上げた。

遺構の掘り下げは、土層観察を行いながら慎重に掘り進めた。遺構内出土遺物については、可能な限り出土位置・高さを記録するように努めたが、調査区内は脆弱かつ湧水が著しく記録は困難を極めた。

遺構実測図は、断面図が1/20、平面図はトータルステーションによった。

写真撮影は、3台のカメラ〔35mm（白黒・リバーサル）・6×7（白黒）〕を使用し、各段階に於て随時実施した。更に、全体写真撮影はラジコン・ヘリコプターによる空撮を実施した。

2. 調査の経過

本調査は、平成8年6月24日から同年7月31日まで実施した。調査経過の概略は以下の通りである。

6月期 24・25日 発掘施設の設営。26～28日 現況写真撮影の後、調査区の北側より表土掘削を開始し、併せて調査区周縁に排水溝を設ける。

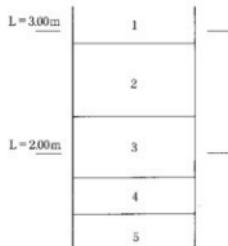
7月期 1～9日 表土掘削と包含層調査を併せて実施する。10日 遺構検出作業とSD1の掘り下げを開始し、調査区内に座標設定と水準測量を行う。11～18日 遺構調査を継続。18日に調査区北側半分の調査を終了し、市教育委員会より北側の終了確認を得る。19日北側の空撮を実施する。20～25日 調査区南側の遺構調査を継続する。26日 遺構調査を終了し、市教育委員会より終了確認を得る。27～30日 遺物・図面・写真等の残務整理。31日 発掘器材の撤収を行い、調査の全てを終了する。

IV. 基本層序

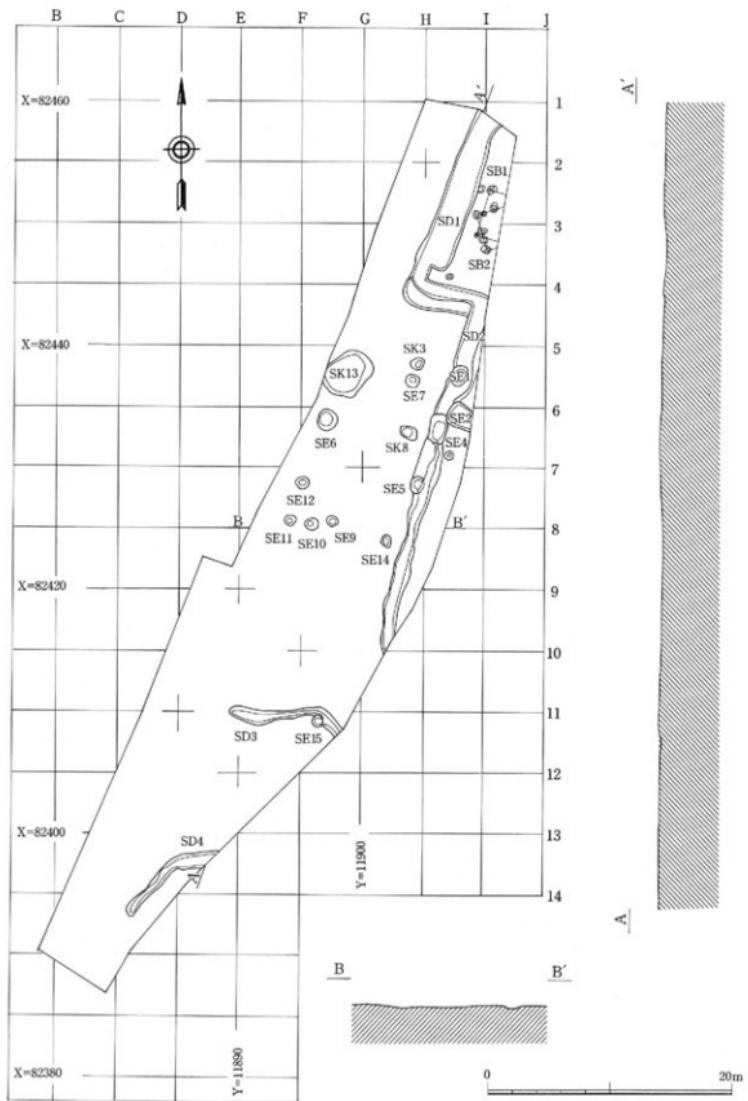
当調査区は、水橋荒町遺跡の南東端に位置し、標高約1mを測る低湿地で地目は水田である。調査区の南東側は湿地ラインに一致し、それ以南は旧常願寺川河川敷と考えられ、粗砂の堆積や激しい湧水地帯となっている。

基本的な堆積は以下の通りである。

1. 水田耕作土 層厚約30cm
2. 青灰色砂土 層厚約60cm
3. 黒色粘質土 層厚約50cm（遺物包含層）
4. 青灰色粘土 層厚約30cm（遺構確認面）
5. オリーブ灰色粘土（地山）



第5図 基本層序模式図



第6図 造構全体図 (1:400)

V. 遺構と遺物

当遺跡地は、水橋荒町遺跡の南東端にある820m²の範囲である。検出された遺構は、掘立柱建物2棟、溝4条、井戸跡11基、土坑2基であり、遺物は古代と中世を主体とし、弥生時代及び近世の土器が極少量ながら得られている。

A. 遺構

1. 掘立柱建物

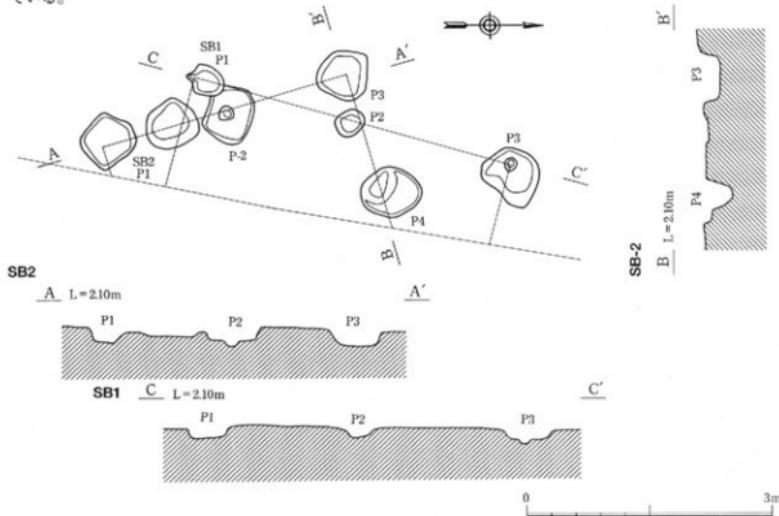
S D 1に囲繞される2棟の建物を想定した。遺構の大半は調査区外に延びており、柱痕は捉えきれなかつたが、柱の「アタリ」と考えられる硬化部が幾つかの柱穴より確認されている。新旧関係は、重複状況よりSB 1が新しい。

S B 1 (第7図 図版2-1、4-7)

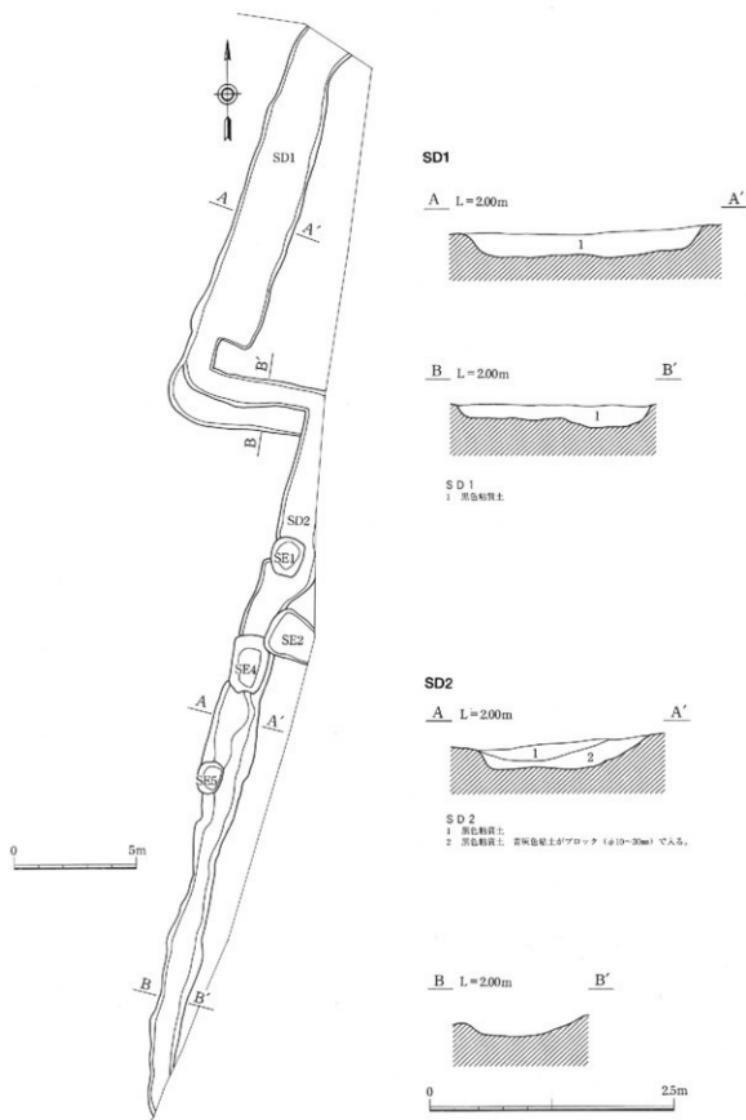
S D 1に西妻柱列を揃える梁間2間、桁行不明の東西棟建物を想定した。妻柱列は16°東偏し、柱間寸法は心々で195m (6.5尺) の等間である。柱掘方は円形を基調としたルーズなもので、埋土は黒色粘質土の単層である。遺物は無かった。

S B 2 (第7図 図版2-1、4-7)

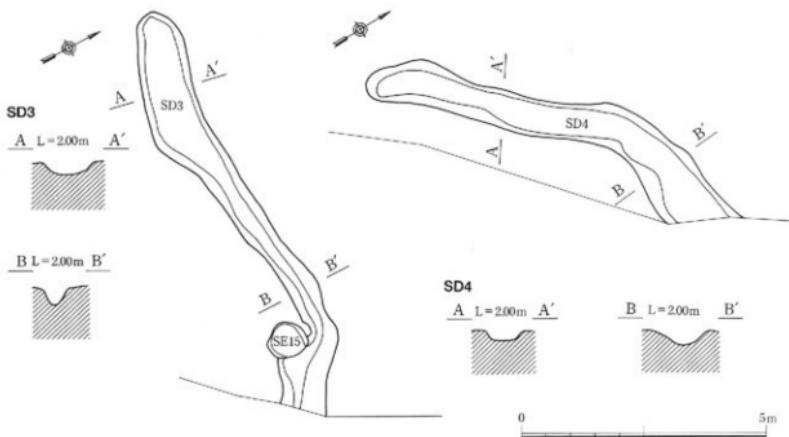
S B 1に切られる梁間2間、桁行1間以上の東西棟建物で、妻柱列は16°西偏する。柱間寸法は心々で梁間1.55m、桁行1.55mの等間であり、1尺を30cmと換算した場合、基準尺に正数値は得られない。柱掘方は略方形を呈し、埋土は黒色粘質土の単層である。遺物はP 3より流れ込みで、弥生土器の細片が1点出土している。



第7図 S B 1・2 (1 : 60)



第8図 SD1・2 (1 : 200)



第9図 SD3・4 (1:100)

2. 溝

4条の溝が検出されている。SD1とSD2は連結しており、底面の高さは全線ではほぼ等しく、走行方向・埋土より一体の機能を有していたと考えられる。

SD3とSD4は地形の傾斜方向に向かって走り、底面の高さはそれに沿って高さを減じている。

SD1 (第8図 図版2-2-3)

調査区北限より走り、南へ15m延びた後、東へ折れる「鉤の手」状の溝である。南北の中軸線は19° 東偏し、規模は幅2.0~2.3m、深さ15~20cmを測り、断面形は皿状を呈する。コーナーの内側には、一辺が1.3mの方形状の張り出し部を有し、南辺の溝には底面より約10cm高い幅1mの平坦面を構築している。埋土は黒色粘質土の単層で、層中には須恵器と木製品が包蔵されていた。

SD2 (第8図 図版2-4-3)

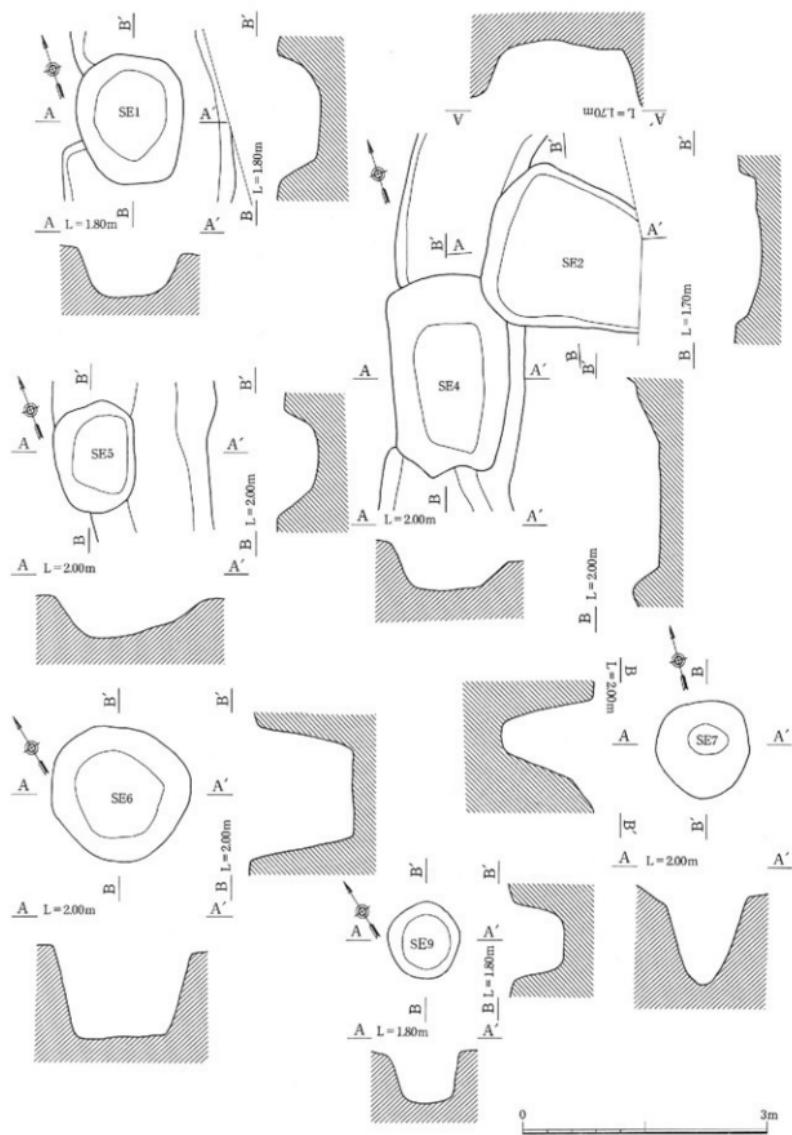
SE1・2・4・5に切り込まれている。SD1の南端より続く南北溝で、29.9m走った後に調査区東限に至る。走行方向は17° 東偏し、規模は幅1.1~2.0m、深さ10~20cmを測り、断面形は皿状を呈する。埋土は黒色粘質土を基調とし、部分的ではあるが青灰色粘土がブロックで入る。遺物は須恵器、珠洲焼、木製品が出土した。

SD3 (第9図 図版3-1)

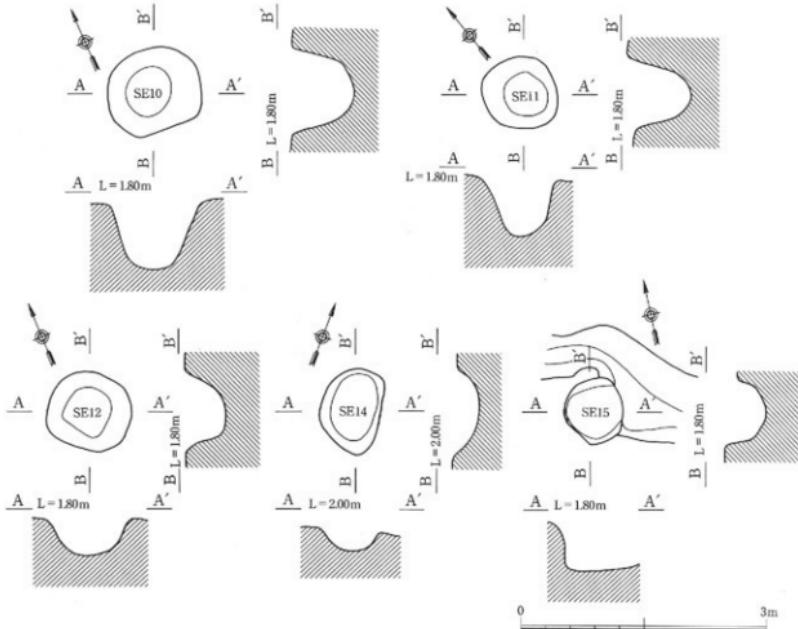
現長9mを測る東西溝で、底面は東へ向かって高さを減じ、両端の比高は約40cmを測る。走行方向は東西軸にほぼ一致し、東端は調査区東限りに至り、西端は調査区中央付近で途絶する。SE15と重複しているが新旧関係は不明である。規模は幅0.7~1.0m、深さ20~40cmを測り、断面形は浅い「U」字状を呈する。埋土は黒色粘質土の単層である。遺物は無かった。

SD4 (第9図)

SD3の南側に検出された現長8mの斜行溝である。底面は東へ向かって高さを減じ、両端の比高は約15cmを測る。東端は調査区東限りに至り、西端は調査区中央付近で途絶する。規模は幅0.9~1.1m、深さ15~25cmを測り、断面形は浅い「U」字状を呈する。埋土は黒色粘質土の単層である。遺物は無かった。



第10図 SE 1・2・4～7・9 (1 : 60)



第11図 SE 10~12・14・15 (1:60)

3. 井戸跡

包蔵遺物、形態、掘り込み深度より12基の井戸跡を想定した。いずれも素掘りの井戸で、調査区中央部付近（E～H-5～8区）に集中して整井されていた。

各井戸の規模・形態は、地層が極めて脆弱で湧水が激しかったことにより、原形を正確に留めている可能性は少ないとと思われる。

SE 1 (第10図 図版3-2)

H-5区に位置し、SD 2を切り込んでいる。平面形は略楕円形、断面形は皿状を呈し、規模は開口部径1.56×1.30m、基底部径1.10×0.87m、掘り込み0.58m、基底標高1.00mを測る。埋土は黒褐色粘質土を基調とし、砂を不規則に含む。遺物は木製品が出土した。

SE 2 (第10図 図版3-3)

H-5・6区に位置し、遺構の一部は東限りに入る。SD 2を切り込んでおり、平面形は現状に於て略方形、断面形は皿状を呈する。現状規模は開口部径1.83×1.30m、基底部径1.60×1.60m、掘り込み0.33m、基底標高0.83mを測る。埋土は黒褐色粘質土を基調とし、砂を不規則に含む。遺物は珠洲焼が出土した。

SE 4 (第10図 図版3-4)

H-6区に位置する。SD 2を切り込みSE 2に切り込まれる。平面形は方形、断面形は皿状を呈する。規模は開口部径2.39×1.43m、基底部径1.52×0.82m、掘り込み0.47m、標高1.20mを測る。埋土は黒褐色粘質土を基調とし、砂を不規則に含む。遺物は珠洲焼、木製品、漆が出土した。

S E 5 (第10図 図版3-5)

G-7区に位置し、SD2を切り込んでいる。平面形は略方形、断面形は皿状を呈する。規模は開口部径1.35×0.98m、基底部径0.88×0.65m、掘り込み0.50m、基底標高1.22mを測る。埋土は黒褐色粘質土を基調とし、砂を不規則に含む。遺物は珠洲焼、越中瀬戸、木製品、環が出土した。

S E 6 (第10図 図版3-6)

F-6区に位置する。平面形は円形、断面形は逆台形状を呈する。規模は開口部径1.69×1.63m、基底部径1.11×1.05m、掘り込み1.12m、基底標高0.52mを測る。埋土は黒褐色土を基調とし、砂を不規則に含んでいる。遺物は珠洲焼、木製品が出土した。

S E 7 (第10図 図版3-7・8)

G-5区に位置する。平面形は円形、断面形は摺鉢状を呈する。規模は開口部径1.21×1.13m、基底部径0.50×0.36m、掘り込み0.60m、基底標高0.98mを測る。堆土は有機質の黒色粘質土を基調とし、層中には古代の土師器甕、環等が包蔵されていた。

S E 9 (第10図 図版4-1)

F-7区に位置する。平面形は円形、断面形は「U」字状を呈する。規模は開口部径0.94×0.87m、基底部径0.67×0.58m、掘り込み0.66m、基底標高0.98mを測る。埋土は有機質の黒色粘質土を基調とし、出土遺物は無かった。

S E 10 (第11図 図版4-2)

F-7区に位置し、東脇にS E 9、西脇にS E 11が検出されている。平面形は円形、断面形は「U」字状を呈する。規模は開口部径1.13×1.05m、基底部径0.62×0.52m、掘り込み0.81m、基底標高0.88mを測る。埋土は有機質の黒色粘質土を基調とし、層中には古代の須恵器が包蔵されていた。

S E 11 (第11図 図版4-3)

F-7区に位置する。平面形は円形、断面形は摺鉢状を呈する。規模は開口部径0.90×0.89m、基底部径0.54×0.51m、掘り込み0.70m、基底標高0.96mを測る。堆土は有機質の黒色土を基調とし、層中には木製品が包蔵されていた。

S E 12 (第11図 図版4-4)

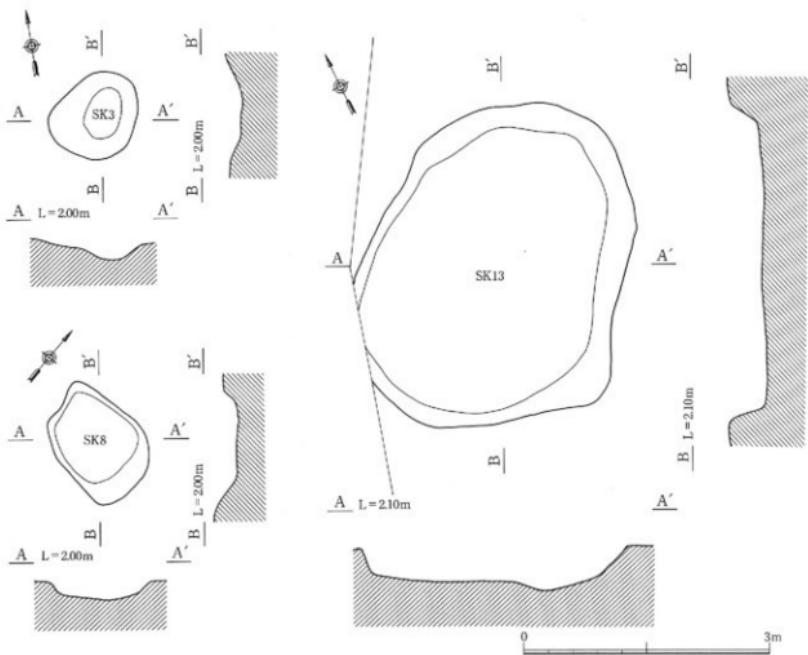
E・F-7区に位置する。平面形は円形、断面形は皿状を呈する。規模は開口部径1.01×0.92m、基底部径0.55×0.54m、掘り込み0.45m、基底標高1.23mを測る。埋土は有機質の黒色土を基調とする。出土遺物は無かった。

S E 14 (第11図 図版4-5)

G-8区に位置する。平面は略円形、断面形は皿状を呈する。規模は開口部径1.05×0.75m、基底部径0.82×0.53m、掘り込み0.43m、基底標高1.49mを測る。埋土は有機質の黒色土を基調とする。出土遺物は無かった。

S E 15 (第11図 図版3-1)

F-11区に位置し、SD3と重複しているが、新旧関係は不明。平面形は円形、断面形は「U」字状を呈する。規模は開口部径0.78×0.70m、基底部径0.60×0.66m、掘り込み0.45m、基底標高1.05mを測る。埋土は有機質の黒色土を基調とし、層中には古代の須恵器が包蔵されていた。



第12図 SK3・8・13 (1:60)

4. 土坑

I・G-5・6区に於て3基が検出されている。各土坑の基底面は、基本層序の第4層（青灰色粘土）中にある、第5層（オリーブ灰色粘土）には達していなかった。

SK3 (第12図 図版4-8)

G-5区に位置し、南脇にS E 7が鑿井されている。平面形は略円形で底面は起伏している。規模は上面径 1.10×0.95 m、下面径 0.64×0.41 m、掘り込み 0.23 m、基底標高 1.52 mを測る。埋土は有機質の黒色土を基調とする。出土遺物は無かった。

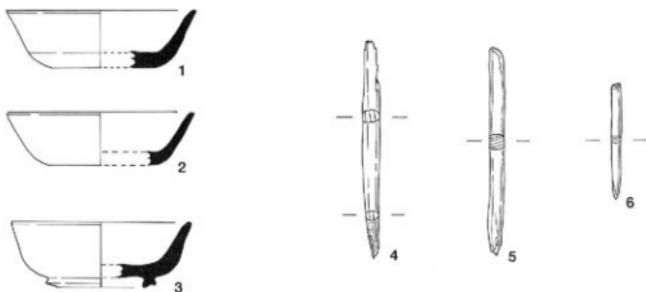
SK8 (第12図)

G-6区に位置する。平面形は略方形、断面形は皿状を呈する。規模は上面径 1.32×1.01 m、下面径 0.98×0.86 m、掘り込み 0.24 m、基底標高 1.59 mを測る。埋土は有機質の黒色土を基調とする。遺物は無い。

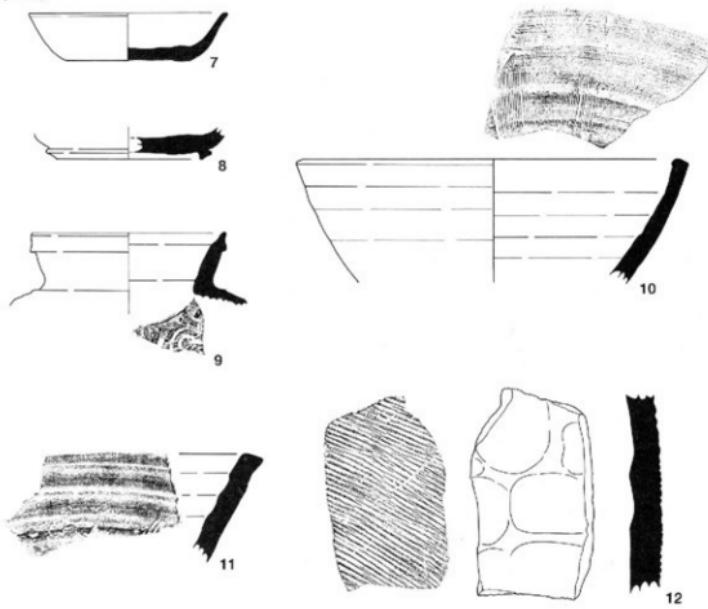
SK13 (第12図 図版4-6)

F・G-5区に位置する。平面形は略方形、断面径は鍋底状を呈し、一部起伏する。規模は上面径 3.87×3.28 m、下面径 3.61×2.83 m、掘り込み 0.35 m、基底標高 1.23 mを測る。埋土は黒褐色粘質土を基調とし、砂を不規則に含む。遺物は珠洲焼が出土した。

SD1(1~6)



SD2(7~12)



第13図 SD1・2出土遺物実測図 (1/3)

B. 遺物

1. 溝

S D 1 (第13図 図版5)

須恵器3点（1～3）と木製品3点（4～6）を掲載した。1は無台坏で、器高3.4cm、復元口径11.5cm・底径6.0cm、口径指数約30、体部外傾度 64° を測る。体部外面にロクロ撫で顯著。色調は灰白色を呈し、焼成あまい。2は無台坏で、器高3.3cm、復元口径11.2cm・底径6.0cm、口径指数約29、体部外傾度 62° を測る。色調は灰白色を呈し、焼成あまい。3は有台坏で、器高4.0cm、復元口径11.0cm・底径5.3cm、口径指数約48、体部外傾度 75° を測る。高台は底面に窪みを有し、内端接地となる。色調は青灰色を呈し、焼成堅緻。4～6は箸状の木製品で、いずれも粗雑に4面を加工し、断面形は方形状となる。現存長は順に13.3cm、12.7cm、7.1cmを測る。

時期は、1～3が8世紀中葉～8世紀末と考えられる。

S D 2 (第13・14図 図版5)

須恵器3点（7～9）と珠洲焼3点（10～12）、木製品4点（13～16）を掲載した。7は無台坏で、器高3.0cm、復元口径12.0cm・底径7.0cm、口径指数25、体部外傾度 60° を測る。底部の切り離しは鉗切りで、色調は灰白色を呈する。8は有台坏で、底部及び高台が遺存する。底径は8.7cmを測り、高台は底面に窪みを有し、内端接地となる。色調は青灰色を呈し、焼成堅緻。9は横瓶の口頭部で、復元口径12cmを測る。口縁は断面が三角形状となり、体部内面に同心円文の當て具痕。色調は青灰色を呈し、焼成堅緻。10は片口鉢で、復元口径は24cmを測り、器体は内溝気味に聞く。口縁形態は方頭の外傾口縁で、卸し目は一単位幅2.5cm・16目の櫛歯原体が使用され、直線文と考えられる。11は片口鉢で、遺存は1/7程度である。器体は直線的に開き、口縁形態は方頭の水平口縁である。色調は灰白色を呈し、焼成はややあまい。12は鄭もしくは車の脇部片で、内面には方形の押圧痕、外面の打圧密度は3cm当たり9～10目程度である。色調は灰白色で、焼成堅緻。13～15は箸状の木製品で、本と末は不明。いずれも粗雑に6面を加工し、断面形は方形状となる。現存長は順に16.7cm、16.0cm、11.0cmを測る。16は詳細不明な部材片で、木取りは正目。

時期は、7～9が8世紀中葉～8世紀末で、10は吉岡編年のⅡ期に比定されよう。

2. 井戸跡

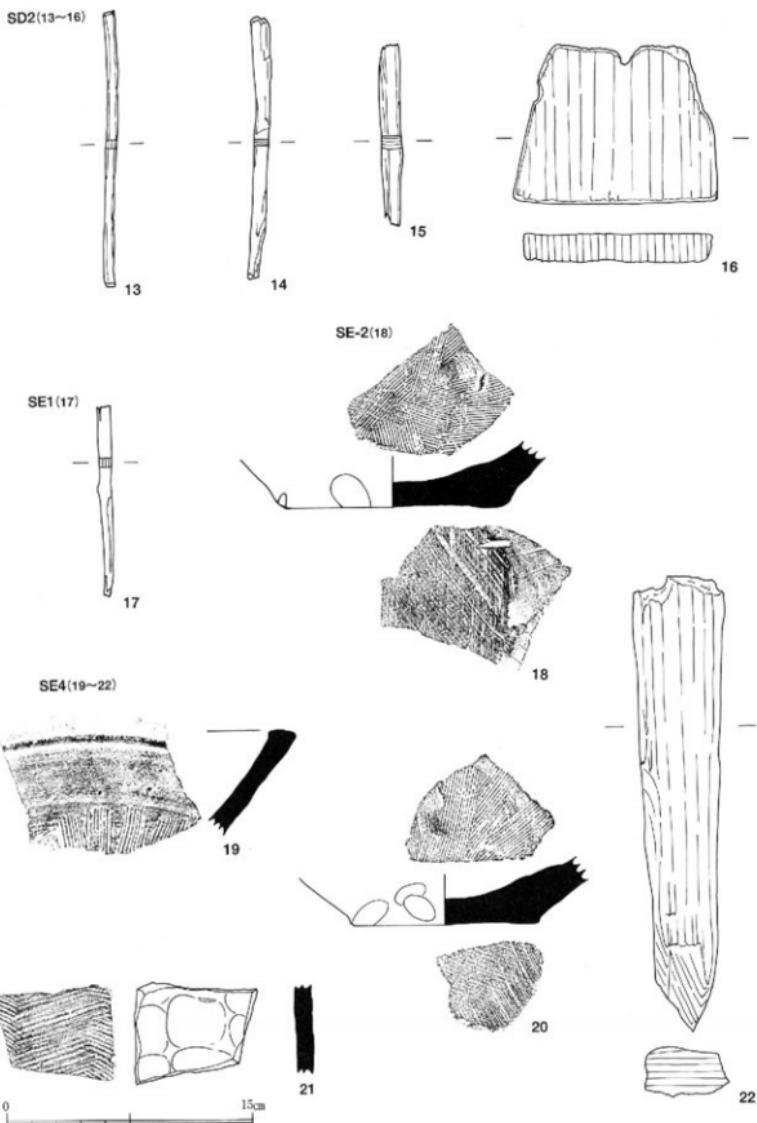
S E 1 (第14図 図版6)

木製品1点（17）がある。17は箸状の木製品で、末は丁寧に、本は粗雑に4面を加工し、現存長11.6cmを測る。

S E 2 (第14図 図版6)

珠洲焼1点（18）がある。18は片口鉢で、内底面に稠密な卸し目が認められる。卸し目は一単位幅2.5cm・15目の中太櫛歯原体が使用され、外底の粗い静止糸切り痕を細かい刷毛状器具で撫でている。復元底径は14cmを測り、色調は灰白色を呈する。

時期は、吉岡編年のⅣ期であろうか。



第14図 SD 2、SE 1・2・4出土遺物実測図 (1/3)

S E 4 (第14図 図版6)

珠洲焼3点(19~21)と木製品1点(22)がある。19は片口鉢で、口縁はやや肥厚気味の水平口縁であり、卸し目は一単位幅1.5cm・8目の中太櫛歯原体が使用される。20は18と同一個体の片口鉢である。21は壺もしくは壺の胴部片で、絞杉状の打圧痕は3cm当たり12日を数え、色調は鼠黒色を呈する。内面に方形の押圧痕顯著。22は杭状の木製品で、現存長27.5cmを測る。

時期は、19~21が吉岡編年のIV2期と思われる。

S E 5 (第15図 図版6)

珠洲焼2点(23・24)と越中瀬戸1点(25)、木製品1点(26)を掲載した。23は壺の口頭部片で、口縁形態は方頭の「くの字」口縁である。叩打が頸基部直下より施され、基部の撫で回しが弱く、3cm当たりの打圧密度は15日である。24は壺もしくは壺の胴部で、3cm当たりの打圧密度は12日である。25は壺で、復元径14cmを測り、茶色の鉄軸を施す。26は板状の木製品で、残存長12.1cm・幅1.8cm・厚さ0.7cmを測る。

時期は、23が吉岡編年のb期で、25は17世紀代と考えられる。

S E 6 (第15図 図版6)

須恵器1点(27)と、木製品1点(28)を掲載した。27は壺の胴部片で、内面に同心円文の當て具痕、外面上に平行の叩き目。色調は灰白色を呈し、胎土は緻密。28は詳細不明な板状の木製品で、残存長7.7cm・幅3.0cm・厚さ0.8cmを測る。

S E 7 (第15図 図版7)

土師器1点(29)がある。29は壺の体部片で、内面にカキメの後ハケ目、外面上半にカキメ、下半にハケ目が施される。内外面及び破断面に煤が付着している。砂粒多く含む。

時期は、8世紀中葉以降と考えられる。

S E 10 (第15図 図版7)

須恵器1点(30)がある。30は壺の体部片で、内面に同心円文の當て具痕、外面に格子状のタタキ目が認められる。胎土は緻密で色調は灰白色を呈する。

S E 11 (第15図 図版7)

木製品1点(31)を掲載した。31は角棒状の木製品で、端部の一面が炭化している。規模は、現存長26.0cm・幅3.0cm・厚さ1.9cmを測る。

S E 15 (第15図 図版7)

須恵器1点(32)がある。32は無台杯で、遺存は3/4程である。底部の切り離しはハラ切りで、器高3.3cm・口径10.2cm・底径6.0cm、口径指数約32、体部外傾度76°を測る。胎土に長石粒・石英を多く含み、器面上に火燶れ状の突起が顕著である。色調は青灰色を呈する。

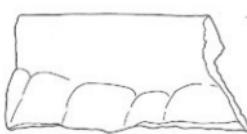
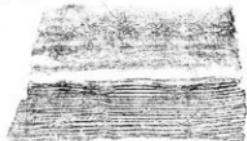
時期は、8世紀中葉~8世紀末と考えられる。

3. 土坑

S K 13 (第16図 図版7)

珠洲焼1点(33)がある。33は壺もしくは壺の胴部片で、内面に方形の押圧痕、外面の打圧密度は3cm当たり12日前後である。

SE5(23~26)



23

24

25

26

SE6(27~28)



27



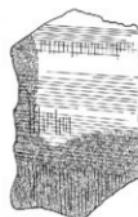
28

SE11(31)



31

SE7(29)



29

SE10(30)



30

SE15(32)



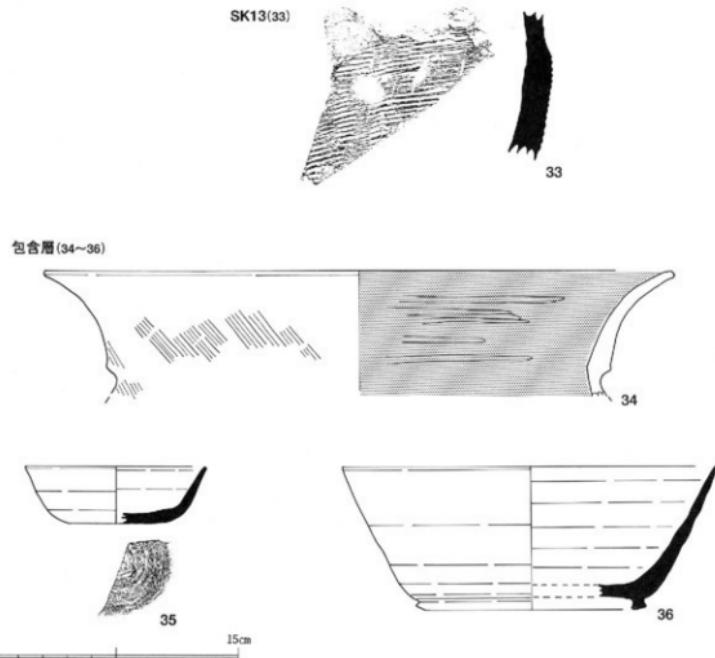
32



31

0 15cm

第15図 S E 5 ~ 7 • 10 • 11 • 15出土遺物実測図 (1 / 3)



第16図 SK13、包含層出土遺物実測図（1／3）

4. 包含層（第16・17図 図版7）

いずれも基本層序第3層（黒色土）に包蔵されていた。検出された遺物は、弥生土器1点（34）、須恵器2点（35・36）、珠洲焼1点（37）、貿易陶磁器1点（38）、木製品2点（39・40）である。34は高杯の杯部で、 $1/3$ 程度遺存する。復元口径は38cmを測り、口縁部は外反して伸びる。内面はヘラミガキに赤彩、外面にハケ目を施す。35は無台杯で、遺存は $1/3$ 程度である。底部の切り離しはヘラ切りで、器高3.5cm・復元口径11.1cm・底径5.6cm、口径指指数32、体部外傾度60°を測る。色調は灰白色を呈する。36は有台杯で、遺存は $1/4$ 程度である。高台は内側に下がって傾斜し、端部は面を成す。体部は直線的に開き、器高8.8cm・復元口径23.0cm・底径12.6cm、口径指指数38、体部外傾度59°を測る。色調は青灰色を呈する。37は片口鉢で、底部の切り離しは静止糸切りである。復元底径は10.5cmを測り、内外面に煤の付着が著しい。38は口禿の白磁皿で、遺存は $1/3$ 程度である。釉調はやや青みをおびる白色で、胎土は灰色。39は棒状の木製品で、断面が六角形を意図して工作されている。両端の太さを比較すると、片方がやや細く仕上げられ、加工は比較的粗雑である。規模は、長さ20cm・幅2.5cm・厚さ2.0cmを測る。木取りは芯持材。40は断面が四角の杭で、端部は3面を荒く加工して尖る。規模は、長さ34.1cm・幅3.7cm・厚さ2.8cmを測る。

時期は、35・36が8世紀中葉～8世紀末で、38は14世紀前半と考えられる。

包含層(37~40)



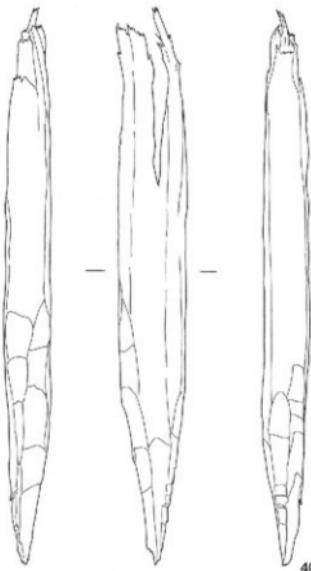
37



38



39



40



0 15cm

第17図 包含層出土遺物実測図 (1 / 3)

VI. まとめ

1. 概観

水橋荒町遺跡は、常願寺川と白岩川に挟まれた標高2.5m前後を測る扇状地の末端に立地し、現在周知されている遺跡範囲は579,000m²に及んでいる。今回調査が実施された地区は、この南東端に位置する約820m²の範囲である。この地点より北西へ約600m付近（現在水橋浄化センター）では、富山市教育委員会により平成3年から5年度にかけて約10,400m²の発掘調査が実施されており、多くの知見が明らかになりつつある。

『富山県埋蔵文化財センター所報 40・44』によれば、绳文時代中期から近世に亘る大規模な複合遺跡であり、その中で最も盛行したのは奈良・平安時代と考えられている。奈良・平安時代に於ける特質事項として、古代の正倉であった可能性を有する建物を含む掘立柱建物群や、それを囲繞・区画する大溝、そして堅牢な木組井戸等が検出されている。これらは計画的に構成されており、遺跡の性格は『延喜式』兵部省に見える越中国八駅の一つである「水橋駅」の可能性が指摘されている。

2. 遺構

検出された遺構は、掘立柱建物2棟、溝4条、井戸跡12基、土坑3基である。各遺構の詳細は「V・A」で述べた通りであり、以下に各遺構の概要と大過なかろうと思われる範囲での年代観について触れる。

掘立柱建物は2棟として捉えたが、桁行の大半が調査区外に延びており、平面規格等については不明である。S B 1は今妻川をS D 1に揃える梁間2間の東西棟建物で、S B 2を切り込んで構築され、柱間寸法は心々で1.95m（6.5尺）の等間である。S B 2は梁間2間、桁行1間以上の東西棟建物で、柱間寸法は梁間・桁行とも心々で1.55mの等間である。いずれもS D 1に囲繞されており、S D 1との強い相互関連が想定される。

溝は便宜上4条として捉えた。S D 1とS D 2は連結しており、走行方向・埋土より一体の機能を有したと判断される。しかしながら、平面形は規格的なS D 1に比べS D 2はルーズなものとなっており、一つの可能性として構築時期の差が考えられる。性格は定かではないが、S B 1・2を含む西方向に展開するであろう何らかの遺構群を囲繞する区画・排水溝の可能性が高い。S D 3・4は地形の傾斜方向に沿って構築されており、規模・形状は両溝ともルーズなものである。時期は、S D 1・2が8世紀中葉から8世紀末と考えられる。

井戸跡はいずれも素掘りであり、12基として捉えた。井戸跡とした主な理由は、井戸祭祀に使用されたと推察される土器、木製品類、礫等の埋納遺物の出土と、基底面がオリーブ灰色粘土層（湧水層）まで達していることである。各井戸は、地層が極めて脆弱で湧水が激しかったことにより、原形を正確に留めている可能性は少ないと想われる。時期は、S E 7・15が8世紀中葉～8世紀末、S E 2・4が13世紀末～14世紀初頭でS E 5が14世紀後半～15世紀前半と考えられる。なお、S E 5より出土した越中瀬戸は、出土状況より当遺構に伴わない可能性が高い。

3. 遺物

遺物は古代と中世を主体とし、極少量の弥生土器と越中瀬戸が出土している。土器以外には、木製品類と礫が出土しているが、その多くは井戸祭祀に起因するものと考えられる。井戸跡以外にもS D 1・2より箸状木製品と礫が出土しているが、井戸跡と重複関係にあることより、井戸跡に伴う可能性が高い。

弥生土器としては、包含層（第3層）より出土した高壙1点（34）がある。時期は、概ね北加賀地域に於ける編年〔谷内尾1983〕の法式（弥生後期）に相当すると想われる。

古代の上器としては、須恵器（無台杯・有台杯・壺）、土師器（壺）がある。32を除く無台杯は、口径指数は25~32、体部外傾度は60~64°を測り、有台杯は高台端面が内側に下がって傾斜する内端接地のものである。土師器壺（29）は体部片で、内外面にカキメが施されている。時期は、いずれも8世紀中葉～8世紀末と考えられる。

中世の上器としては、珠洲焼（壺・壺・片口鉢）、白磁皿がある。珠洲焼の壺（23）は、叩打が頭基部直下より施され基部の撫で回しが弱く、吉岡編年Ⅴ期の特徴を有する。片口鉢（10）は、体部が内湾気味に開き、口縁形態は方頭の外傾口縁で、卸し目は一単位幅2.5cm・16目の細密な櫛歯原体を使用しており、吉岡編年Ⅱ期と考えられる。同じく片口鉢の19は、体部は直線的に開き、口縁はやや肥厚気味の水平口縁で、卸し目は一単位幅1.5cm・8日の中央櫛歯原体を使用しており、吉岡編年Ⅳ期と思われる。他の珠洲焼は、遺存状況の乏しさより定かではないが、吉岡編年Ⅳ期の範疇にあると考えられる。

以上のように当遺跡は、8世紀中葉～8世紀末、そして13世紀末～15世紀前半代に構築された遺跡であることが判明した。冒頭でも述べた通り、当遺跡より北西600m付近では現在発掘調査及び整理調査が進行しており、更なる知見が明らかになりつつある。よって、当地区の性格は、それらの成果を踏まえたうえで改めて考察する必要があろう。

註・引用文献

- 1 富山県埋蔵文化財センター「木橋窪町遺跡」『富山県埋蔵文化財センター所報 第40・44号』 1992・1993
- 2 吉岡康暢 「中世須恵器の研究」吉川弘文館 1994
- 3 桥本 正・齐藤 隆他 「南田中D遺跡発掘調査報告書」 富山県埋蔵文化財センター 1991
- 4 壺の体部外傾度については、器高の三分の二地点より上で計測している。

図版 1

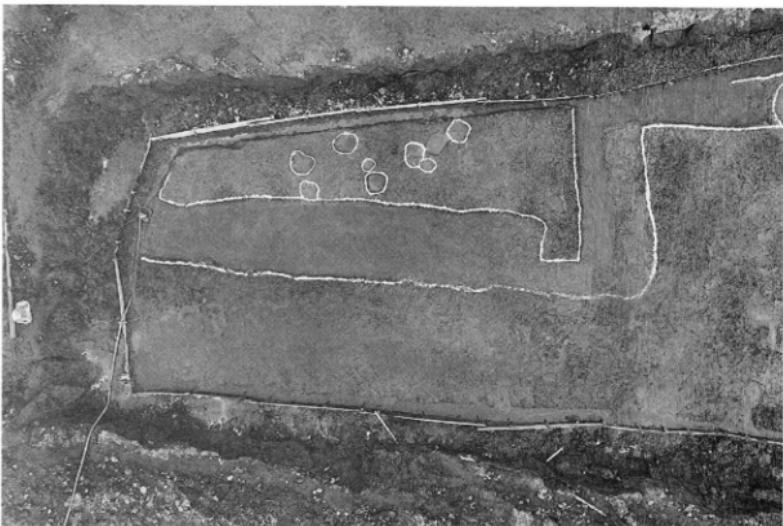


1. 調査区遠景（空撮）



2. 調査区全景（空撮）

図版 2



1. SB1+2、SD-1 (空撮)



2. SD1、SB1+2 (北より)



3. SD1断面 (東より)



4. SD2 (東より)



5. SD2断面 (北より)

図版 3



1. SD 3、SE 15 (東より)



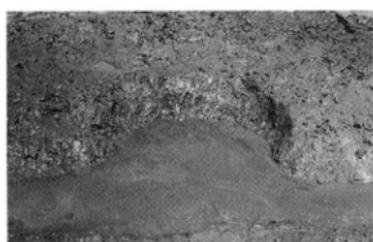
2. SE 1 (東より)



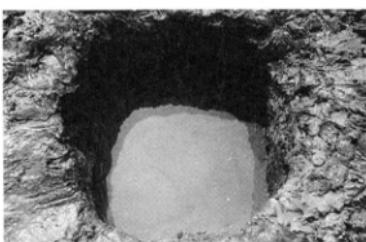
3. SE 2 (東より)



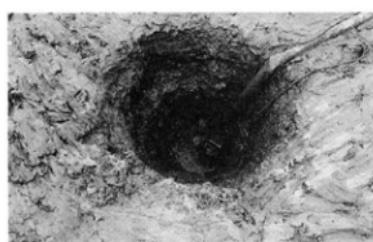
4. SE 4 (北より)



5. SE 5 (南より)



6. SE 6 (東より)



7. SE 7 (南より)



8. SE 7 近景

図版 4



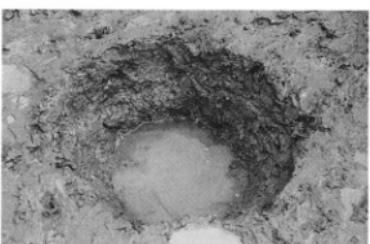
1. S E 9 (南より)



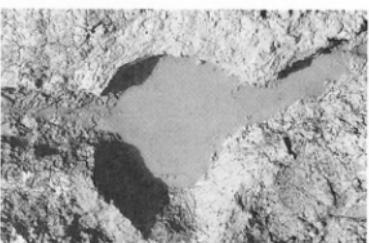
2. S E 10 (南より)



3. S E 11 (南より)



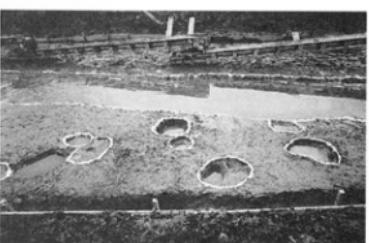
4. S E 12 (北より)



5. S E 14 (北より)



6. S K 13 (北より)

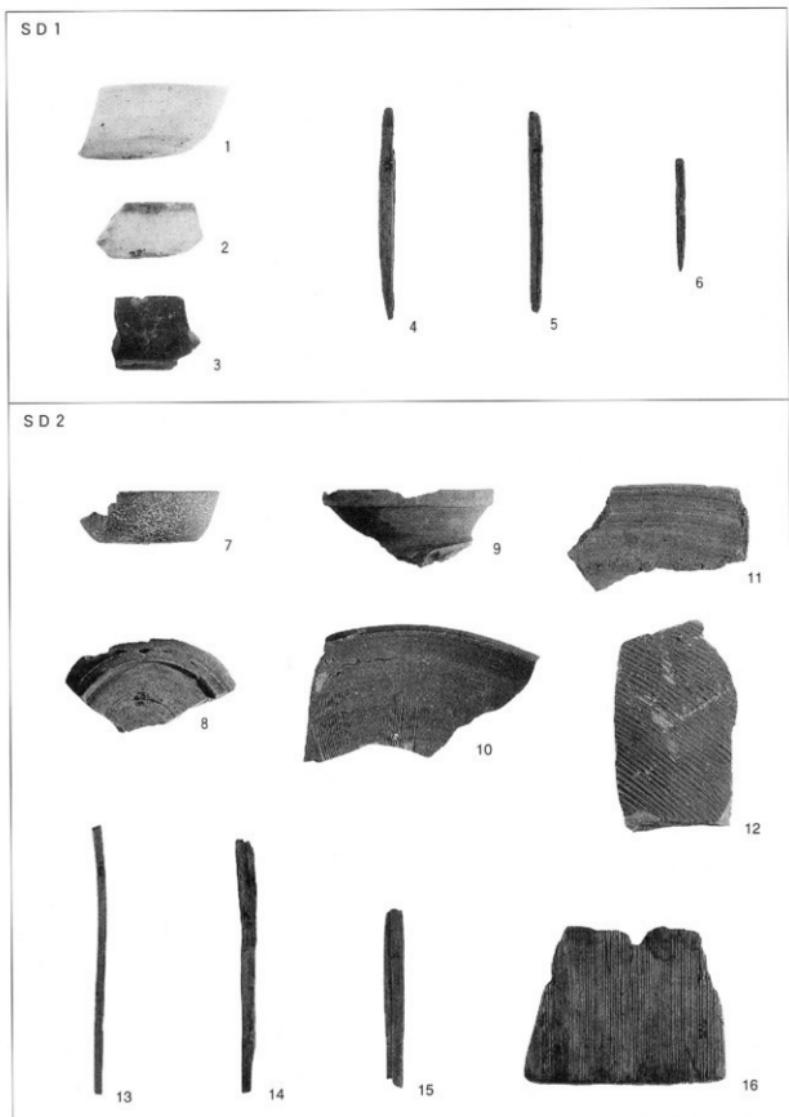


7. S B 1・2 (東より)

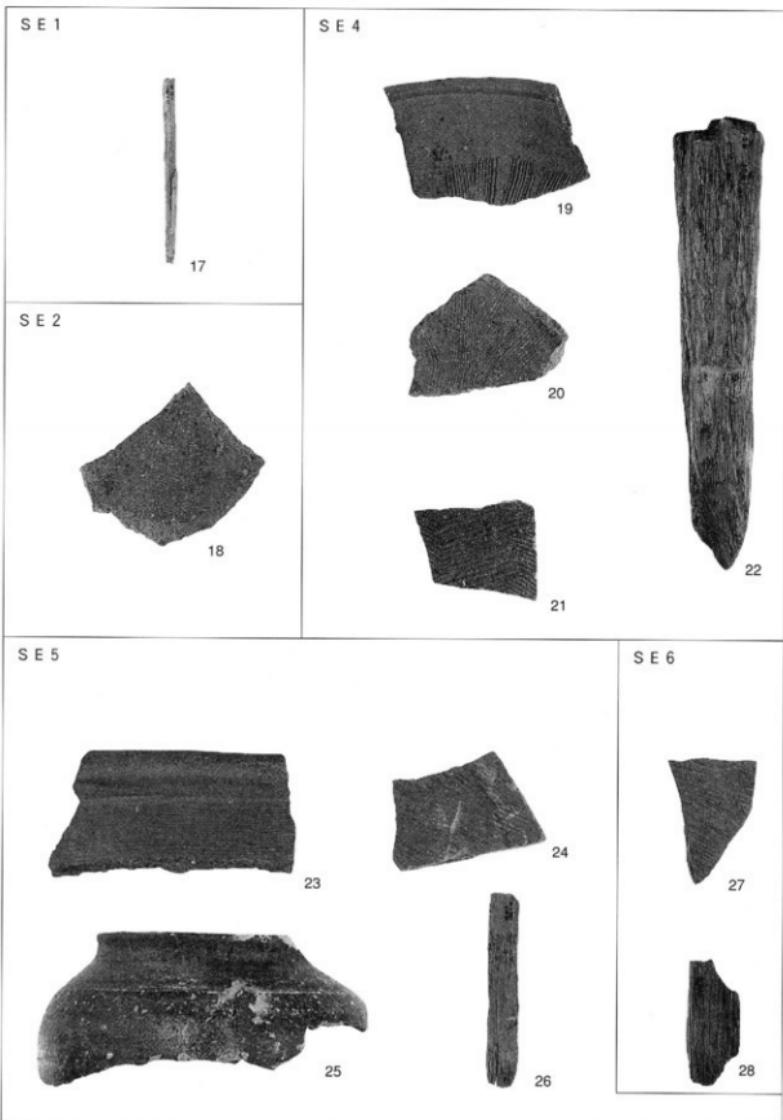


8. S K 3 (東より)

図版 5

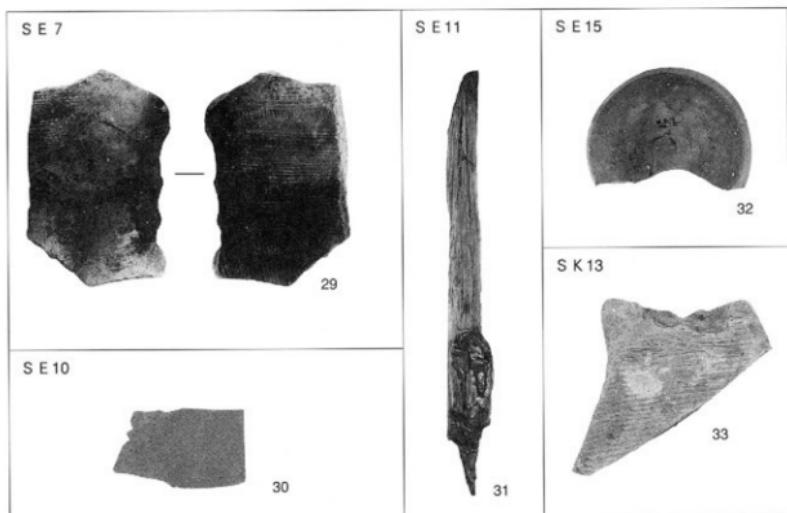


図版 6

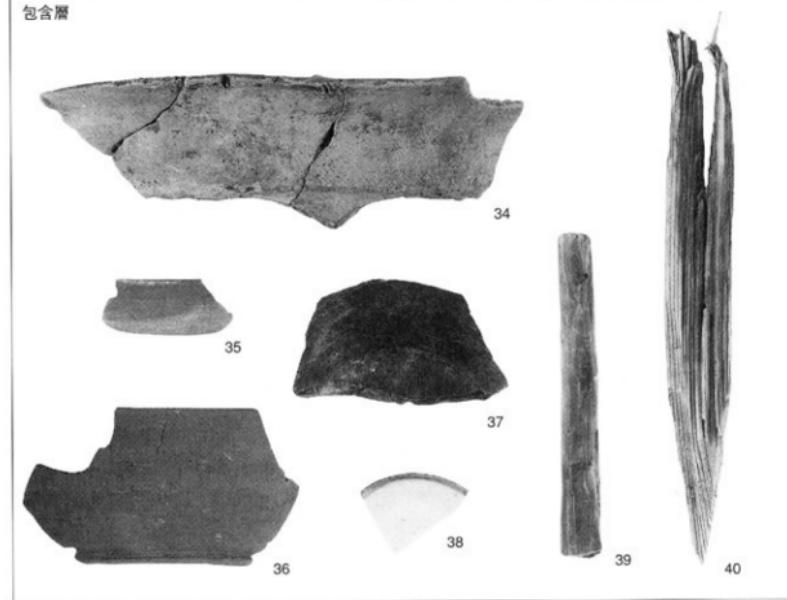


SE 1・2・4~6 出土遺物

図版 7



包含層



S E 7・10・11・15、S K 13、包含層出土遺物

報告書抄録

フリガナ	ミズハシアラマチイセキ							
書名	水橋荒町遺跡							
副書名 シリーズ番号	病院施設等建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
編著者名	古川知明・桐谷 優							
編集機関	山武考古学研究所／〒286 千葉県成田市並木町221番地 ☎0476-24-0536							
発行機関	富山市教育委員会／〒930 富山県富山市新桜町7-38 ☎0764-43-2138							
発行年月日	西暦1997年10月31日							
フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所 在 地	コ ー ド		北緯	東經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ミズハシアラマチイセキ 水橋荒町遺跡	ミズハシアラマチイセキ 富山県富山市水橋辻ヶ堂 408番地内	16201	044	36度 44分 34秒	137度 17分 78秒	19960624 ~ 19960731	820	病院施設 建設工事
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
水橋荒町遺跡	集落跡	弥生時代		高坏				
		奈良時代	溝 2条 井戸跡 4基 掘立柱建物 2棟	須恵器 土器 石	：壺・無台坏・ 有台坏・横瓶 ：壺 ：自然縞	方形状に廻ると 予想される濃の 内側より掘立柱 建物跡が検出さ れる。		
		中世	井戸跡 3基 土坑 1基	珠洲焼 中国陶磁 木 器 石	：壺・壺・片口鉢 ：皿 ：箸状木製品 ：自然縞			
		近世			越中瀬戸：壺			
		時期不明	溝 2条 井戸跡 5基 土坑 2基		木 器			：杭

病院施設等建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

富山県富山市水橋荒町遺跡

平成9年10月31日

発行 富山市教育委員会
富山県富山市新桜町7-38

編集 山武考古学研究所
千葉県成田市並木町221

印刷 株式会社文化総合企画

